

変化

津守 真

四月のはじめ、新学期になって二日目、朝いちばんにいつも登校するKが庭の水たまりで遊ぶのに私はつき合っていた。いつもだとひとり泥をシャベルですくったり、木の葉を散らしたりして遊ぶことが多いのだが、この日は私の手をぐいぐいと力強く引張った。私が一緒に泥水に手をいれると、私の顔を見上げてにっこり笑う。私がKから目をはなして別の方を見ていると、後から私

の手を引いて相手をするように催促するので、私はKと遊びつづけることになった。これは休の間の子どもたちの成長である。

次々に子どもたちが門から入ってくる。新学期になって久しぶりの学校に、子どもたちには戸惑いがあるのではないかとの緊張感が私の側にあって、別の子どもが来るたびに私は立ち上って迎えた。ある子どもはちらと私の



顔を見て傍を通りすぎ、ある子どもはしばらく私とやりとりをしてからそれぞれの新しいクラスの部屋へと向かっていった。

聞きなれない泣き声がするのでふり向くと、水たまりで泥水の遊びをしているKである。私が近寄ると、泣き顔に笑いを浮べて私を見上げた。これは私の心の落着かなさから生じたことである。私はうかつだったと思い、気をつけてKの傍にいるようにした。けれども次々に登校する子どもの中には、私が立上ってしばらく相手をしないとすまない子どももいて、私は両方の子どもの間をうろうろしてしまふ。

また気が付くと、門のはるか手前の椿の樹の植込みの彼方で立止り目を凝らして庭の方をうかがっている子どもがいる。R夫である。この前に会ったのは卒業式の日で、私の式辞の最中に手をひいて遊びを要求したのだった。父親がいそいで連れにきて、それ以後私はR夫と会っていないかった。彼は私とかなりの時間一緒に遊ばないという一日が滑り出さないので、前学期には私はこの子ども

と朝のうちを過すことが多かった。この日、R夫は学校の庭が前と変わらないままかどうかを樹木の間からうかがっているように思えた。私が手をふるると遠くから笑い返して、走って門から入ってきた。これは学校の環境の変化を予想した子どもの反応である。私はいつもと同じようにこの子どもと身をいれて遊ばないと、学校に対する信頼を揺るがすことになると思い、一方にKのことも気になりながらR夫について部屋にはいった。ずっと時間がたつてから見ると、Kは他の先生とたのしそうに遊んでいた。私が傍にいられない状況になったとき、この子どもは私の心配をよそに、他の先生の手をひいて新しい展開を試みたのだろう。こうして子どもは私の見えないところで行くところのつながりの輪をひろげていくのだと思う。

R夫も私が新しい子どもとかわっている間に、今年度のクラスの担任の先生との間で新しい関係を展開して遊ばはじめていた。

外から見たら、私とこの子どもたちとのつき合いはい

つもと変らぬように見えたかもしれない。けれども、私から云えば、KもR夫も学校側の新学年の環境の変化に応じて、早くも新しい生き方をつくり上げようと試みているのではないかと思う。

新しい学年になると、クラス編成、友だちの顔ぶれ、担任の配置、教室などが変化する。子どもには、以前と同じ空間が違って感じられるだろう。できるだけ子どもにとって戸惑いが少なくすむように、こちらも身をいれてしっかりとつき合いたい。しかし、おとなの側にも環境の変化は大きい。まだ慣れていない新しい子どももあるし、担当のクラスもかわり、新たに要求される役割もある。その私の側の変化によって、私は以前と同じように振舞っているつもりでも、子どもにとっては違ったように感じられるだろう。子どもはそれに敏感に反応する。新学期、互いに戸惑っている私たちである。

新学年度はじめには、否応なしの変化がいろいろあるから、子どもたちができるだけいつもと同じような自分自身の生活ができるようにと、私共はあらかじめ考慮

した。ひきつづき来る子どもたちにとっては、卒業式、入学式と特別な日が重なるのは遊べない日がつづくことだから、昨年から私の養護学校では入学式は新入生だけにして、新学期のはじめの日から弁当をもっていつもと同じ生活ができるようにした。また、子どもが馴染みの部屋に好きなようにゆけるようにと、職員の間でとくに確認し合った。

変化とは、人の内的な面からいうならば、自分自身および周囲に対する感じ方が以前とは違っているという相違の感覚であり、現在に自分がまだなじまない感覚であり、したがって予測のつかない未来への不安を伴っている。そこで変化に直面して人はまず以前のままの同じ自分を保とうとする。しかし変らない状態を維持しようとするとは現在には不満のもととなるだろう。むしろ、以前とは違う状況におかれている自分自身を受け入れること。そして新たな自分を形成しはじめることにより、変化をより高い次元への展開とかわえることができる。環境の変化には自分がそこに押出されてゆくといい受身の側面が

あるが、それだけでなく、自分が進んでそれを引き受けて新たな自分をつくり出すという能動の側面がある。すなわち自分としての新たな課題にとりくむことである。それが具体的にどのようなようになされるかは人によってまちまちであり、人生の時期によってもちがう。

新学年のはじめには、おとなの側が環境の変化に戸惑っている。保育者は子どもと生活を共に生きることを自らの人生とする者であることをあらためて自覚し、そのことに身を委ねることが受身から能動へと生活を積極的にかえてゆくだろう。予測もしなかった新学期の混乱に当面し、あらためて子ども側に立つ覚悟をきめることにより自分と子どもとの生活を新たなものに形成することもある。また、同僚や親たちと共に子どもを育てる生活をつくることに保育の新たな意味を見出すことも重要である。いずれも、変化に直面して、新たな状況にある自分を受けいれ、より広い視野に立って、新たな自分を形成する行為である。

このことは子どもも同様である。子どもが変化の危機

を成長の契機となしうるかどうかは、同じ状況を生きているおとながそれをどう生きるかということと関連しているのではなからうか。

(愛育養護学校)